

エッセイ

特別展示「マッサン展」に寄せて ―知られざる歴史秘話と展示に向けた作業の顛末―

高橋 周平

白石 仁章

はじめに

外交史料館では二〇一四年九月二十四日より二〇一五年五月八日まで「マッサン展」と題した特別展示を開催している。今回の企画は従来の外交史料館特別展示と比べ、いささか趣を異にしている。その一番のポイントとは、NHKの朝の連続テレビ小説（いわゆる「朝ドラ」）。以下、朝ドラとする。で「マッサン」が放映開始されることを意識し、朝ドラ「マッサン」の主人公のモデルである竹鶴政孝（以下、政孝とする）に焦点をあてた展示を組んだことである。そのため、当館所蔵記録を補填し、より充実した展示内容とするためアサヒビール株式会社（以下、アサヒビールとする）などから多数の史料をお借りしたことも、初めての試みであった。

新しい挑戦には試行錯誤がつきものであることに異論はあるまい。

今回の企画にあたっては試行錯誤の連続であった。そして、その過程で得たさまざまな体験を、担当者間で「よきメモリー」として埋もれさせてしまうのはもったいのではないか。『外交史料館報』の読者層を考えれば、類縁機関の皆様にとつて、多少なりとも将来の展示企画を考える上で参考になるかもしれない。また、研究者の皆様には、今後当館所蔵史料から自分の研究テーマに即した史料を探すにあたり、何らかのインスピレーションを得るきっかけを提供できるかもしれない。そのような考えからまとめたのが本稿である。

本稿は、二部構成となっている。第一部は、今回の特別展示開催の背景、そして実現に向けての経緯などを紹介することとし、高橋が担当した。第二部は、第一部で紹介したコンセプトに即して具体的な展示史料をどのように集めていったかについて明らかにすることとし、白石が担当した。また、「おわりに」は、二人の共同執筆である。

本稿が既に「マッサン展」を観て下さった読者の理解を深める一助となる、あるいはまだ観ていない読者が「観に行ってみようか」と思っ
て下さるきっかけとなれば、筆者両名にとって幸甚の至りである。

第一部 マッサン展開催の背景および経緯

私(高橋・外交史料館長)は一九七四年に外務省に入省し、二〇一
五年三月末で四一年に及ぶ役人人生に幕を閉じることになる。その役
人人生最後の二年八カ月を外交史料館に勤務した。それまで、新しい
国に勤務するたびにその国の歴史や日本との関係などを調べることは
あったが、歴史を専門的に勉強したことのない素人である。その素人
が、「マッサン展」開催に至る経緯や裏話を披露することによって如
何ほどの意義があるか自信はないが、同様の展示を企画しようとする
方にとって少しでも参考になってほしいと考え、筆をとることにした。
また、在外公館に勤める者の立場から、赴任国と日本との歴史的つな
がりに関係者にアピールするために、どのような活動をしたのかを記
録に残すことも私の責任であると考え、本稿を書くことにした次第で
ある。

一. スコットランドと日本の関係

(一) 赴任当時のスコットランド

二〇〇四年の秋に在エディンバラ日本総領事館へ総領事として赴任

した際、私の最大関心事は、翌年に予定されていた「二〇〇五年 日・
EU市民交流年」をどの様に迎えるかという一点であった。エディン
バラに日本総領事館が設置されたのは一九九三年のことであるが、日
本におけるバブル経済崩壊、ベルリンの壁崩壊による東欧諸国の西欧
への経済進出、更には世界規模での中国の経済的台頭などにより、残
念ながらスコットランドにおける日本の経済的プレゼンスは下降線を
たどっていた。一時は七〇社を超えていた日系企業も五〇社を維持す
るのも困難な状況に変わっていた。着任早々から挨拶も兼ねて日系企
業を回り始めたが、多くの企業が厳しい競争に晒されていることを思
い知らされた。初めての企業訪問が、撤退の知らせを東京に報告する
機会となるという哀しい現実にも遭遇した。

スコットランドにおける外国の存在感、特にアジア諸国に関しては
中国のそれが圧倒的であった。現地の政・官・財・学各分野の要人を
訪れ、話をしてみると、まるで日本が経済大国であった時代ははるか
かなたに去り、どこもかしこも「中国ブーム」一色といった感じであっ
た。その象徴がスコットランドでは三大学にあった日本語講座がエ
ディンバラ大学一つだけになったこと、それに対して中国からの留学
生の数が急増し、エディンバラ大学内に儒教研究センターが設置され
ることなどに表れていた。

そんな逆風の中、私は着任挨拶で訪れた方たちに、「二〇〇五年 日・
EU市民交流年」の意義を積極的に訴え協力を求めた。ところが、多
くの方は、市民交流年そのものを知らなかった。さらに驚いたことに

は、英国がEUに加入しているという自覚すらない方が多数いた。この背景には、英国がユーロを導入せず、ポンドを維持していることもあったと思われる。そこで総領事館の文化担当官とも相談し、日・EUではなく、実態は日本とスコットランドの「市民交流年」であることを前面に出すことにした。文化担当官が現地スタッフと一緒に苦労して作った自前のポスターにも、スコットランドの国旗をあしらえるなど、スコットランド色をできるだけ前面に押し出すように努めた。幸い手作り感満載のポスターも好評で、数多くのスコットランド人の協力を得て、いろいろなイベントを企画・実施することができた。

私にとって何よりも嬉しかったことは、このような交流が、二〇〇五年の一年限りという一過性に終わることなく、日本とスコットランドの文化交流を翌年以降も継続していくこととなったことである。「二〇〇五年 日・EU市民交流年」という機会にあたり、いろいろなところで蒔いた種は、翌年以降に芽を出し、花を咲かせることになったのである。

そして、スコットランドの皆さんに私が最も強く訴えたのは、日本とスコットランドには長く、深い歴史的なつながりがあり、それらの事実を一つ一つ掘り起こすことによって、一時的な経済関係の動静などには微動だにしない、一層強靱な関係を未来に向け共に築いていきたいということであった。以下、日本とスコットランドの歴史的結びつきの具体例を紹介していくこととしたい。

(二) 日本とスコットランドの歴史的つながり

一八五三年に米国の東インド艦隊提督のペリーが黒船を率いて浦賀に來航し、翌年日米和親条約が結ばれ、下田（後に下田は開港となる）と箱館（現、函館）が開港された。一八五八年には米国初代総領事のハリスとの間で安政五カ国条約の最初となる日米修好通商条約が結ばれ、横浜、長崎、新潟、神戸が追加的に開港となり、江戸と大坂も開港されることになったことはよく知られている。しかし、同様の条約（日英約定や日英修好通商条約）が英国と結ばれたことまでは知っていても、英国の締結権者が誰かまでは余り知られていない。

当時の国際関係をみると、アジアでは圧倒的に大英帝国の影響力が優勢で、米国は「新参者」に過ぎなかった。日本側と交渉にあたった人物を見ても、個人的な資質はともかく、外交官としての経験を豊富に持つものは英国の方が圧倒的に多かった。にもかかわらず、日本の開国に至る過程で米国が果たした役割があまりにも大きかったため、ともすると英国が果たした役割が忘れられがちになる傾向がある。さらには、英国の中でもスコットランド人が果たした役割が大きいことは、ほとんど知られていない。そこで、幕末以降の日英関係を簡単に振り返り、スコットランド人の活躍を検証することとしたい。

日英約定（一八五四年、一般には日英和親条約といわれている）の英国側代表は、東インド・中国艦隊提督のスターリングであり、日英修好通商条約（一八五八年）の英国側代表は第八代エルギン卿であったが、ともにスコットランド人であった。

エルギン卿は清国との間で起こったアロー号事件とそれに続くアロー戦争(第二次アヘン戦争)を処理するために特使として中国に派遣されていた。アメリカが日米修好通商条約締結に成功した情報に接し、急ぎよ日本に派遣されたのであった。

エルギン卿は既に、ジャマイカ、カナダで総督を務め、外交官としての輝かしい実績と経験を有していた。海軍軍人であったペリー提督、あるいは五〇歳を過ぎてから外交の分野に飛び込んだ米国のハリス初代総領事に比べ、大英帝国の外交官としての経歴(カナダでは「建国の父」と評価されることもある)に裏付けられた見識と交渉力を有していた。

日米修好通商条約を巡る日米間の交渉は、英国を筆頭とする列強に苦しめられている中国を例に挙げ、「脅迫」ともいえる態度でハリスが日本に条約締結を迫り、日本の対応を決定する上でも効果があつたといわれている。そもそもハリスは、日本との交渉にあたり、その前に結ばれた英国とタイ(当時の国名はシャムだが、本稿では現在の国名であるタイで統一する)との修好通商条約交渉を参考とするためにタイに滞在した。それらを勘案すると、英国は間接的ながら、日米間の条約締結に重要な役割を果たしたとも言えよう。

日本との条約締結交渉に臨むエルギン卿の遭遇した諸問題、その際における彼の心情などを彼の残した記録をもとに探ってみよう。

日本において、エルギン卿は、幾つもの制約のもとで条約交渉に当たらざるを得なかった。第一に、時間的制約があつた。アロー号事件

の結果清国と結ばれた天津条約の批准書交換を三週間後に控えていたので、それまでに日本との交渉を終わらせる必要があつた。第二に、言語の問題があつた。長年鎖国を続けた日本と唯一交渉していたヨーロッパの国がオランダであつたことは周知のとおりだ。そのため日本との交渉にはオランダ語が外交公用語であり、英語からオランダ語への通訳者が必要であつたが、残念ながら英国の全権団にはオランダ語を解する者がいなかった。第三に、条約の交渉にあたって全権委任状が必要であることは、長年外交官を務めたエルギン卿にとっては常識以前の問題であつた。しかし、彼は中国との交渉の全権委任状は与えられていたが、日本との交渉にあたっての正式な全権の地位は与えられていなかったのだ。因みに、日英約定を締結したスターリング提督も正式には全権の地位を与えられていなかったといわれる。

時間的制約は、エルギン卿にとって深刻な問題であつた。なぜなら、ハリスが英国とタイとの条約を研究したとの情報を得たので、日本とも同様の条約を結んだのではないかと当然考えられた。もしそうであれば、英国とタイとの条約は、著しく英国に有利な内容であつたので、同様の条件を日本に納得させることは困難であり、時間がかかることが危惧されたのだ。ところが、日米修好通商条約の内容は、英国とタイとの間のそれに比べ、はるかに米国側に有利な内容が少ない、換言すれば不平等な内容が少ないことがわかり、同様の条約を結ぶことは、短期間の交渉で可能であることが見込まれた。その意味では、ハリスの「脅し」はまんざら嘘ではなかったことになる。

通訳の問題は、存外容易に解決した。米国のハリス総領事を下田の玉泉寺に訪れ、ハリスの下で通訳を務めたオランダ人のヒュースケンに日英間の通訳も依頼することが出来たのである。

全権委任状については、ロシアのプチャーチンが全権委任状を持参していなかったために江戸に向かうことができなかったと仄聞していたので、エルギン卿としても頭の痛いところであった。

全権委任状と時間的制約の問題を一気に解決する突破口となったのが、ビクトリア女王から日本の将軍へのプレゼントであるエンペラー号という蒸気船であった。エルギン卿艦隊、四隻の一隻である。エルギン卿が日本に着いたのは長崎港で、日本側からは下田や江戸への渡航を何とか思いとどまるように説得されていた。これに対し、本国からの訓令として、エンペラー号を江戸にて直接将軍に献上するように命じられているとして、エルギン卿は同号を長崎から下田へ移動させた。ハリスが一八五七年に江戸城まで乗り込み謁見している以上、大英帝国の面子にかけても江戸での調印を実現せねばならず、「エンペラー号の献上」こそ、江戸に向かう格好の口実となったのだ。

江戸城において条約が調印された八月二十六日、エンペラー号は無事日本側に引き渡された。その際二発の礼砲が轟き渡ったが、エルギン卿自身が「まれにみる立派な礼砲であった」と記録にとどめている。ペリー来航時には、独立記念日の祝砲で住民がパニックを起こしたため、条約調印の礼砲を省略せざるを得なかったことと比べると、日本社会が国際的慣行に少しずつではあるが慣れつつあった状況が垣

間見られて興味深い。なお、木造スクーナー蒸気船のエンペラー号はその後日本名に変え、日本海軍に就役し、最後は一八九七年に解体されるまで捕鯨船として使われた。

全権委任状については、エルギン卿の心配は杞憂であった可能性が高かったと思われる。二〇〇年以上もの鎖国に慣れ、外圧によって開国したばかりの日本人の中で全権委任状の意味を知っている者が果たしていたであろうか。ここで想起されるのが、後の岩倉使節団である。使節団が条約改正のために米国を訪れた際、米国側より全権委任状の提示を求められ、大久保利通と伊藤博文が急きょ帰国したことはよく知られている。それより十数年前の日本側に全権委任状の重要性が認識されていたとは思えない。

米国と英国の日本への対応の違いは、米国が和親条約締結を踏まえ、下田に領事館（一八五六～五九年）を開いて外交活動を展開し、その後通商航海条約を結んだのに対し、英国は日英修好通商条約の締結後に初めて江戸に領事館（一八五九）を設置したことに端的に表れている。英国が準備不足のまま強引に交渉を進めた観は否めず、エルギン卿に課せられたさまざまな制約の根源はそこにあったと言えよう。これは、当時の東アジアにおいて列強の関心が中国に集中している中で、米国のみは捕鯨船の安全確保、あるいは中国航路市場への中継点として日本を無視できなかったということに収斂される。中国問題への対処で余裕を失っていた状況下、日本との交渉が遅滞なくまとまったのは、エルギン卿の外交手腕によるところが大きかったと言えよう。

因みに、第八代エルギン卿は、再度中国特使として中国に渡って北京条約を結び、最終的にはインド総督を務め同地で客死した。最後まで外交官として、その生涯を閉じたのであった。

(三) エルギン卿の子孫との面会

二〇〇七年、私に帰国の内示が出た後、運良くエルギン卿の子孫にお目にかかることができたことも忘れられない思い出だ。

そもそも、エルギン卿は、スコットランドで最も有名な英雄といわれるロバート・ブルースの直系の子孫である。一三世紀末、スコットランドは、イングランド王エドワード一世の侵攻により国王が追放され、イングランドの属国とされてしまった。そこで立ち上がったロバート・ブルースは、自らスコットランド王位に就き、一三二四年にスターリング城近くの「バノック・バーンの戦い」でイングランドのエドワード二世を破り、独立を回復した国王として有名である。二〇一四年はバノック・バーンの戦いの七〇〇周年にあたることから、スコットランドの各地ではさまざまな記念行事が行われた。

そのエルギン卿の子孫が今どうしているのかは、私にとって着任以来興味をもっていたことであった。その頃、在英大使館から東京への報告電報の一本が在エディンバラ総領事館にも転電され、私の興味を喚起した。第八代エルギン卿の子孫であるチャールズ・ブルース伯爵(以下、ブルース卿とする)が駐英日本大使を訪ね、四年後の二〇〇八年が日英修好通商条約締結一五〇周年に当たるので、第八代エルギ

ン卿のコレクションを展示する機会を作ってもらいたいという依頼があったという内容であった。私は、いつの日か、日本とスコットランドとの交流に役立てる日が来るかもしれないの思いで、その電報の内容を手帳にメモしていた。

その後、前述の「二〇〇五年 日・EU市民交流年」の準備で多忙を極め、また、スコットランドには、ハイランド地方に「エルギン」という名前の町があり、無意識のうちにエルギン卿はその地にゆかりのある人物に違いないと思い込んでいたこともあって、積極的にエルギン卿の子孫を探す間もなく、帰国が迫っていた。

そのようななか、ある大学関係者から、大学訪問の招待があった。その方とは着任レセプションでお目にかかって以来、イベント等と一緒に実施する機会にも恵まれなかったもので、せめて最後に大学を訪問しようと思い、招待を受けることとした。大学を訪れると、彼の紹介で学長とも面会し、昼食を共にしながら懇談した。私からはいつもどおり、総領事館としてのこれまでの取り組みや、総領事としての個人的な考えを示し、学長からも、総領事館との関係を通じて日本との交流を深めていきたいという申し出があり、懇談はなかなか進んだところ、学長から思いもかけない言葉が出てきた。大学の近郊に日本とゆかりのある歴史的人物の子孫が住んでいるというのである。「まだ知らない日本とスコットランドの隠れた関係があったのではないか」との好奇心をくすぐられる思いで、その人物の名前を尋ねると、なんとエルギン卿であった。

第一一代エルギン卿が存命で、エディンバラ近郊のファイフに居を構え、その子息であるブルース卿が後継者に決まっているというのだ。まさか、エルギン卿の子孫が、実はエディンバラから目と鼻の先に住んでいたとは思ってもよらなかった。

私は、頭をフル回転させ、この「運命的な出会い」を形に残したいと考えた。その時点で、私のスコットランドにおける最後の主要な仕事として、スコットランド研究で著名な創価大学の北政巳教授による講演会を三カ所で開催する予定があった。時間的にはかなり厳しいが、その大学でも講演会を実現できないか打診してみたいとの衝動に駆られた。最後まで「当たって砕ける」の姿勢で通すのも私らしいのではと、思い切って申し入れてみた。

「日本のスコットランド研究者が来る予定があるのですが、貴大学で講演会を開催していただくことはできませんか？ 開催に際してはレセプションを行い、公邸料理人の日本食を提供します。勿論、主賓としてエルギン卿を招待させていただきます。」

みるみる学長たちの目が輝き、返事は確認するまでもなかった。ただし、ロンドンの日本大使館にも、大使館としてエルギン卿との関係で、具体的に何か行事を企画していないかを念のため確認した。同様の行事が二つのルートで行われるのは好ましくないと考えたからだが、その点も問題なく、北教授の了解も得て、講演会の計画は順調に進んだ。

当日は、残念ながらエルギン卿自身は、膝の手術の直後ということ

もあって欠席だったが、子息であるブルース卿とその姉君が参加して下さった。私にとっては、帰国直前のまさかの対面であり、ブルース卿とその姉君にも喜んでいただけたようで、急ぎよ講演会を開催してよかったとしみじみ思う。

さらに、講演会の数日後、私はお礼もかねてエルギン卿の公邸を訪ねる機会を得た。広大な敷地に比べると公邸自体はその大きさもメンテナンスもかなり「控えめ」との印象を受ける佇まいであった。公邸では、エルギン卿とブルース卿がそろって出迎えて下さり、歓談のあと、第八代エルギン卿のコレクションを拝見させていただいた。

それまで、本の中でしか見たことのなかった、第八代エルギン卿によつて日本から持ち帰られた貴重な品々が、日常品の一部として階段の壁や机の上など公邸内のそちらこちらにさりげなく置かれていることと自体、私にとっては大きな驚きであった。この貴重なコレクションを日本の多くの方に見てもらいたいとの思いを強くしたが、帰国後の私にはスコットランドとは関係が薄い任務が待っていたので、心残りに悩まされた。ところが、幸いにも、北教授がその後も積極的に動いて下さり、エルギン卿を日本側関係者たちに紹介して、展覧会が開催される運びとなった。日英修好通商条約にもゆかりのある横浜市の神奈川県立歴史博物館で、「日英友好一五〇年の礎を築く 第八代エルギン伯爵と絵画工芸品展」が開催されたのである。条約締結一五〇周年に当たる二〇〇八年ではなく、横浜開港一五〇周年の二〇〇九年開催とはなったが、日本での展示会実現は感激の至りであった。

展示の初日にはブルース卿による記念講演会も開催され、ブルース卿は、その講演の中で私のことについても言及して下さり、身に余る光栄、スコットランドを離れて二年以上の歳月が流れたことを忘れる瞬間であった。日本とスコットランドの長い深い関係を偲ぶとともに、歴史的事象が現在までしっかりとつながっていることを実感できる貴重な機会となった。

なお、二〇一四年にエルギン卿が住んでいるファイフで行われたバノック・バーン七〇〇周年記念行事の主催者は、第一一代エルギン卿が務め、ブルース卿はロバート・ブルースが十四世紀に使っていたといわれる剣を携え、行列の先頭を務めたとのことである。

(四) 渡邊嘉一とスコットランドー忘れられないワット夫妻

スコットランドに赴任して三カ月後の天皇誕生日レセプションの際にスピーチで渡邊嘉一(わたなべかいち)について言及した。スコットランドを象徴する、「十九世紀の土木工学の奇跡」とも言われるフォース鉄道橋の建設に、唯一の日本人として従事したことを紹介したのである。日本とスコットランドの歴史的絆を示す一例として触れたのだが、その場にいたスコットランド人の多くにとっては初めて聞く話だったに違いない。

その後、フォース鉄道橋をその麓まで行って見学し、その関係の博物館にも足を運び、さらには関連図書も収集したが、スコットランド側の記録には、渡邊嘉一の具体的貢献について書かれているものは殆

んどなかった。渡邊嘉一の経歴を時系列でたどると、工部大学校(東京大学工学部の前身)を卒業し、グラスゴウ大学に留学した時点では、既にフォース鉄道橋の工事は始まっていた。グラスゴウ大学を卒業し、フォース鉄道橋の建設会社には雇われたのは事実であるが、ほぼ二年後にはフォース鉄道橋の完成を見届ける前に日本に帰国した。

フォース鉄道橋の原理を示す有名な「人間橋」の写真の真ん中に、彼が座っていることから、彼こそがフォース鉄道橋の設計そのものに関与したと主張する研究者もいるが、それを裏付ける資料や記録は今のところ発見されていない。その写真は、王立研究所でフォース鉄道橋の設計者である英国人二人を両端にして、一八八七年に撮られたものと言われている。なぜ渡邊嘉一が王立研究所でフォース鉄道橋の構造原理を説明する設計者たちに同行することになり、「人間橋」の写真に納まることになったかについて、理由が判然としない限り、スピーチなどの際に彼のことを言及することは難しく思われ、いつしか渡邊嘉一に関して話す機会は少なくなった。

やがて時は過ぎ、二〇〇七年の春に本省から突然帰朝の内示があった。赴任後二年半を過ぎたばかりの頃であったので、一番驚いたのは私自身であった。夏以降に開催予定で準備中のイベントも少なくな、中には私自身の提案や企画によるものも含まれていたもので、関係者に迷惑がかかることが危惧された。また、内示の段階なので余り公には明かすことは出来ず、非常に辛いところであった。しかし、いろいろなイベントの企画にあたり、まるで兄弟のように親身になってくれ、



フォース鉄道橋と記念碑

苦労を共にしたスコットランド人の友人であるボブ・ワットには連絡して、申し訳ないとい心から詫びた。

ところが、しばらくしてそのボブ・ワットから電話があり、フォース鉄道橋を記念したモニュメントの除幕式があるから主賓として参加してほしいと依頼された。フォース鉄道橋のモニュメントの除幕式になぜ私が主賓として招かれるのか合点がない気持ちもないではなかったが、そこは変に遠慮することは、かえって外交官として失礼にあたると考え、喜んで参加させてもらうと返事した。

そして七月、セレモニー当日を迎えた。スコットランドのサモンド首席大臣と私が、フォース鉄道橋の麓にあるレストランの前に建てられたモニュメントを覆っていた日本とスコットランドの国旗を除幕して、セレモニーが始まった。そして、首席大臣は、フォース鉄道橋には日本人の渡邊嘉一が関与していたこと、そしてその日本を代表して日本の総領事が出席してくれたことに感謝するとスピーチをして下さった。私のスピーチは辞退させていたのだが私に対する扱いは正に主賓そのものであった。その時の模様は同日のテレビでも放映さ

れ、翌日の新聞各紙でも大きく報じられた。

その後、帰国に際し、友人の新聞記者が私に関する記事を書いてくれたのだが、その時に掲載された写真は、フォース鉄道橋の記念碑除幕式での首席大臣とのツーショットであった。

帰国して間もなく、スコットランドから嬉しいニュースが届いた。フォース鉄道橋と渡邊嘉一が映っている「人間橋」がスコットランドの二〇ポンド紙幣の図柄として採用されたというのだ。私には、スコットランド人の気持ちは何よりも嬉しかった。「人間橋」のデザインが採用されるに当たってどのような議論があったかは承知していないが、渡邊嘉一が中央にいてそれが日本人であることを十分理解した上で、あえて採用しているのである。スコットランドで最新の技術を学んだ日本人が、その後日本でも「鉄道の父」と讃えられるほど活躍した。そのことを素直に喜び、紙幣のデザインに採用して貰えるスコットランド人の懐の深さに敬意を表したい。

フォース鉄道橋とは直接関係のない私に対する最大限の友情の印として、除幕式のお膳立てをしてくれたボブ・ワットは、「人間橋」

フォース鉄道橋記念碑をバックに



ワット夫妻

サモンド
首席大臣

筆者

の二〇ポンド札の発行を待つようにして亡くなった。彼の奥様からの知らせには、「ボブはラガーマンらしく最後まで勇気をもって闘った。それを妻としても誇らしく思う」と認めてあった。私には二〇ポンド札の「人間橋」は、ボブ・ワットから私に対する命がけの最後のプレゼントのように思えてならない。

(五) マッサンとスコットランド

スコットランド滞在の三年間で驚かされたことの一つが、日本と深い関わりをもったスコットランド人について、日本から多くの関係者が訪れ、彼らスコットランド人の日本での業績を顕彰するため、いろいろなイベントを企画・実施していたことだ。その度に私もその人物に関する記録や書物を再確認し、スコットランド人への紹介に努めたものだ。

翻って、スコットランドと深い関わりをもった日本人のスコットラ



博物館の展示
(リタさんの着物、筆者撮影)

ンドにおける認知度はいかほどであろうか。前出の渡邊嘉一などはむしろ例外に属し、ドラマ「マッサン」の主人公のモデルとなった政孝も、残念ながら現地では全くと言っていいほど知られていなかった。政孝と結婚したリタさんの故郷カーカンテロフには小さな博物館があり、一部のスペースにはリタさんが愛用していた着物や政孝とのツーショット写真も展示されていたが、訪れる人はまばらであった。

それが今回のNHKの朝ドラ「マッサン」のお蔭で、町はリタさんの話題で盛り上がりつつあるそうだ。朝ドラの紹介に始まり、リタさんを「日本のウイスキーの母」として讃える記事など、新聞のかんりのスペースを割いて紹介されているというのは嬉しい限りだ。

実は、カーカンテロフの博物館で政孝やリタさんに関する展示が行われるにあたっては、偶然的の産物という面もあったので、そのエピソードを紹介したい。一九八〇年代の初め頃、北海道余市町の職員がカーカンテロフを訪れ、リタさんの生家（当時はカーカンテロフの庁舎となっていた）を探しまわっていた。その様子を偶然目撃した地元の東ダンバートンシャーの職員が、不思議に思い質問したところ、かつてリタさんという女性がこの街で生まれ育ち、日本に渡って、余市で亡くなっていたことを教えられたというのだ。この偶然の出会いがきっかけとなり、それ以来東ダンバートンシャーと余市の交流が始まり、一九八八年にはついに姉妹都市提携として結実した。天国で政孝とリタさんも喜んでいるに違いない。

リタさんに話を戻そう。日本に渡ったリタさんのことを、スコット

ランドの人々がほとんど知らなかったことは無理もなからう。彼女は、結婚して日本に渡ってからは、里帰りをしたことも二回のみで、ことに最後の里帰りとなった一九三一年から、亡くなる一九六一年までの三〇年間は一度も帰らなかったのである。

その間に第二次世界大戦が起こった。日本に帰化していたにもかかわらず、明らかに白人の容姿をしたリタさんは、心ない人から石を投げられ、スパイの嫌疑までかけられたこともあった。政孝をはじめ周囲が心配し、中立国を通じて戦争が終わるまでスコットランドに避難することを勧めたが、気丈にもリタさんは帰国を拒み日本人であり続けることを望んだのであった。

当時のリタさんと非常に似通った状況におかれた例として、後述するトマス・グラバーの長男トムこと倉場富三郎の悲劇を紹介したい。グラバーは、日本女性ツルと結婚し、その間に長女ハルも生まれたが、グラバーの婚外子であったトム（ツルの実子であるとの説も有力である）も、グラバーとツルのもとで育てられ、後に日本に帰化し、倉場富三郎の名前で日本人として生きる道を選んだ。故郷である長崎の街を愛し、長崎の発展に寄与し続けた彼だが、第二次世界大戦により運命を狂わされてしまった。海を臨む高台にあるグラバー邸から、戦艦武蔵建造の一部始終が見えてしまうことを恐れた軍部により、住み慣れた邸を立ち退かされ、それに加え英国のスパイの容疑を受け続けたことは、彼を精神的に追い詰めた。そして、愛する長崎の街が原爆による惨禍を受ける様子を目の当たりにし、終戦直後、連合軍が進駐し

てくるとの風説が流れる中、自殺する道を選んだのであった。

心底日本を愛し、日本人になりきろうとしたリタさんや富三郎が、たとえ戦争という特殊事情のもとであったとしても、スパイの容疑をかけられ、筆舌に尽くしがたい苦勞をしいられたことに対してやり場のない憤りに胸が締め付けられる。

それにしても、そのような逆境に耐え抜いたリタさんの強さは、どこからきたのであろうか。私は、生来のスコットランド人気質に加え、忍耐強さなど伝統的な日本女性が持つプラスの側面を日本で身につけ、そこにさらに「時代の影響」が加わったのではないかと考えている。「時代の影響」とは、第一次世界大戦中から世界的規模で女性の社会進出が高まり、近代女性として期待される「先進性」も持った自立した女性であったからこそ、日本という「異文化」に飛び込むことが可能だったのではないか。

政孝が日本のウイスキーの「生みの親」だとすれば、それを二人三脚で支えたリタさんの功績は政孝と同様に顕彰されるべきであろう。そのような素晴らしい女性を生んだスコットランドも新たな視点で見直してもよいと思うのは私一人だろうか。

（六）トマス・グラバーを通じて日本をアピール

スコットランドへの赴任に際し、最も私が知りたいと思ったことは、日本で最も著名なスコットランド人の一人であるトマス・グラバーが、現代のスコットランドの人々にどのように認識されているかであった。

グラバーが長年暮らし、今や観光名所として名高いグラバー邸がある長崎市と、グラバーの故郷であるアバディーン市との関係がどうなっているかについても関心をもっていた。

赴任前、赴任国の駐日大使館や関連文化団体、関係者などにあいさつ回りしてできるだけ情報を集めておくことは必要不可欠である。私も、長崎市の東京事務所を訪問した。そこで知らされたことは、長崎市の方はアバディーン市との姉妹都市提携に非常に熱心で、それまでもいろいろな形で働きかけてきたが、アバディーン市の方が余り関心を示さずなかなか話が進まないということであった。

なぜアバディーン市側は消極的なのであろうか。私は、エディンバラ赴任後できるだけ早い時期にアバディーン市を訪ね、その背景を探ることにした。アバディーン市の市長に面会し、本件を話題にすると、先方は消極的事実を率直に認めた上で、姉妹都市交流が直面する問題を説明してくれた。長崎市に限らず姉妹都市を提携することに対しては、単なる友好関係樹立では意味がなく、アバディーン市にとって何らかの「実利」が必要だというのだ。すなわち、姉妹都市提携を結んでも議員が外遊し、無駄金を捨てるだけに終わり、貿易や雇用などの面で具体的な利益をもたらさないのであれば、マスコミも市民も認めないというので、市当局としても慎重にならざるを得ないというのである。先方の話には首肯せざるを得ない面もあるが、ここで簡単に引き下がるわけにはいかない。交流には、長期的視野も必要だということから、グラバーの例を通じて、文化交流は息の長い話ではある

が、結果的に経済交流を促進する面もあることを訴えた。

具体的に市長に伝えたのは次のようなメッセージであった。

グラバーは、日本の近代化をサポートした人物として日本で最も有名なスコットランド人である。彼が住んでいた長崎市にあるグラバー邸は年間二〇〇万人の観光客で賑わっている。市長訪問のあとアバディーン市のグラバーハウスも訪れてみるつもりだが、日本とスコットランドの歴史的な関係を顕彰することによって、アバディーン市への関心が高くなれば、経済面でも裨益するはずである。

さらには、経済関係は景気の影響を受けやすいが、歴史的な関係や文化関係は一過性のものでなく、二国間のより長く深い関係を貫いているもので、利益の有無を超えて、当事国の人間としてそれらを後世の人たちに伝えていくのが我々の責任である。マスコミに叩かれるのは困るとの気持ちはわからないではないが、マスコミの言いなりになってばかりいるのではなく、彼らも気が付いていない文化交流の重要性を我々としてはもっともつと訴えていくべきである。そして、何よりも大事なのは、「姉妹都市提携」を結ぶことそれ自体が目的ではなく、実際の交流を一步でも二歩でも進めることではないか。

市長は静かに聞いていたが、次第に顔は紅潮して、うなずきながら「話をよくわかったので、市長として出来る限りのことをやるよう努力したい。今後とも連絡を緊密にしていきたい。」と応じてくれた。

私のスコットランド在勤中にグラバー関係、ひいては長崎市とアバディーン市の交流促進に対する側面援助として行ったことは、大きく



グラバーハウス（アバディーン市HP）



グラバーハウスの入り口
（筆者撮影 2004年）

分けて（i）グラバーハウス再建問題、（ii）グラバー生誕記念行事、（iii）書道作品寄贈問題があるので、それぞれ簡単に経緯をまとめることとしたい。

（i）グラバーハウス再建問題

市長との会談の後、せっかくアバディーンを訪ねたのであるから、グラバーハウスⅡ彼が育った家を見学しておこうと思った。ところが、総領事館の運転手が道に迷い、なかなか到着できない。彼は、私の前任者の時に、一度一緒に行ったというのだが、看板も出ておらず、駐車場もないような所なので、結局は何人か現地の人に尋ねてようやくたどり着くことができた。

一見、庭つきのやや広めな敷地にある普通の建物にすぎない。午後一時頃着いたのだが、玄関は閉まっていて、人の気配もない。ガラス

で囲まれた中にある玄関を見ると、驚いたことに壁に大きな穴まで開いていた。これでは、とても来館者を迎える博物館には見えない。中に入ることは諦め、建物の周りを一周して、庭に向かおうとすると、突如建物に灯りがとり、人の気配がして玄関を開ける音がした。中から人のよさそうなスコットランド人が出てきて、「私は管理人です。当館は予約制です。今昼寝をしていたのですが、特別に案内しますよ。」と言ってくれた。中は普通の家に家具や家財が置かれており、壁には日本のカレンダーや書道の作品が所狭しと飾られていた。正直に言って、グラバーの博物館というよりも、管理人の住居にグラバーの関連品が同居しているという感じであった。これでは、長崎市とアバディーン市の姉妹都市提携までは相当長い道になると感じた。

その日のうちにエディンバラに戻り、グラバーハウスの再建計画に向けて私ができることを考えた。再建と言っても当事者ではないので、直接できることは殆んどない。しかし、スコットランド人にトマス・グラバーの存在を知ってもらい、関心を持ってもらうことこそ第一歩であろう。

そのために活用したのがオペラ「蝶々夫人」である。「蝶々夫人」は、直接グラバーを題材にしたオペラではないが、グラバーを取り巻く人間模様をヒントにした可能性が大きいことは指摘されている。私の周りには歌手や演奏家、ストーリーテラー（昔話の語り部）などの仲間がいて、彼らの間ではオペラ「蝶々夫人」の鑑賞会まで実施するほどの盛り上がりを見た。言うまでもないが、私としては機会ある毎に、

グラバーが幕末から明治初期にかけてさまざまな分野で貢献し、明治維新の「影の立役者」と見なされることもあるスコットランド人ということを必ず紹介し続けた。

スコットランド議会の議員の事務所を訪れ、たまたまアバディーン市の出身者であることがわかると、必ずグラバーについて説明し、長崎市との交流促進の話も伝え、環境整備に努めた。

アバディーン市には、グラバーとの関係だけではなく、日本との文化交流に欠かせない人物や団体が多数存在した。その一つが空手協会である。意外に思われるかもしれないが、スコットランドには幾つもの空手協会が存在し、アバディーンに本部を置く空手協会は組織的にも実績面でも非常に充実し、精力的に活動を展開していた。その会長が非常に親日家で、人脈も広く私の仕事に対してもさまざまな形で支援してくれた。アバディーンで空手の大会がある度に私がスピーチする機会も頂戴したほどだ。

そのような活動を展開していた頃、アバディーン市議会でグラバーハウスのための予算が認められたというニュースが届いた。予約制ではなく常時開館体制に改め、説明員も常駐することになったというものであった。

その後、アバディーンを訪問した機会にグラバーハウスにも立ち寄ったが、玄関の壁の穴は修復され、館内には三名もの説明員がいて来館者に対応する体制になっていた。その時の私が懷いた正直な気持ち、急激な改善が行われても、それが長続きしないことへの危惧で

あった。説明員は、一人でもいいから、そのポストが半永久的に維持されることが望ましい。換言すれば、来館者が急激に増える見込みのない状況で、短期的に予算がついても長続きしないのではないかと懸念したのである。また、私にとつて残念でならなかったのは、専門の説明員が常駐することとなったため、最初に訪れた際の管理人が解雇されたことである。専門の説明員に劣らないだけの知識を有し、案内してくれていたのが、本人にとっては寝耳に水の知らせであつたに違いない。大変な親日派であり、日本人の間にもファンがいるほどであつたので、何とも後味の悪いことになった。

その後グラバーハウスの体制は予算の継続が認められず、元の状況に逆戻りし、更に「閉鎖」の危機にもさらされながら、なんとか今まで存続している。もともと日本になじみのないスコットランド人にグラバーの功績を理解させ、グラバーハウスまで足を運ばせるのは至難の業なのである。

「マッサン」のようにグラバーを主役にした映画やドラマが作られれば良いのだが、日本の近代化や明治維新に果たしたグラバーの役割に対して革新的な見直しがなされなければ困難であろう。見方によれば、討幕派に武器を売った「死の商人」というイメージを懐く向きもある。彼の業績を根本的に見直すことも必要ではないか。

(ii) グラバー生誕記念行事

グラバーハウスの問題とは別に、彼の業績を顕彰するためのイベント実施は、比較的順調に運んだ。



グラバー生誕記念レセプション
(スコットランド議事堂
2006年 筆者所有)

ディアを出した。主催者は提案者の議員とアバディーン市長と私の三人にすることになった。単にレセプションとして人が集まるだけではなく、日本とスコットランド双方の文化交流の場にすることも合意された。日本側にできることとして、長崎市長と長崎のグラバー邸の寄贈者である三菱関係者から祝辞をいただけるようお願いすることになった。

そして、グラバーの誕生日である六月六日にスコットランド議事堂の委員会室を借り、スコットランドで初めてグラバーの生誕記念イベントが開催された。当日は、子供たちによる空手演技、琴演奏、クラシック（スコットランド・ハープ）演奏、ハイランドダンスなど多彩な演目のほか、グラバーをモチーフにして出版されたばかりの小説の紹介も兼ねるなど成功裏に終了し、グラバーの生誕記念イベントを毎年開催することでも関係者の間で意見の一致をみた。

私もよく知っているアバディーン市選出の議員が中心となり、グラバーの生誕日をスコットランド議事堂で祝うというアイデアである。私はこのアイデアを聞いてその場で全面的に協力することを約束し、こちらからもいろいろアイ

翌年の第二回実施に向け、私と議員との間で打ち合わせを重ね、イベントの演目もスコットランド学生による着物ショーをメインイベントにすることで関係者の了解もとれ、準備は着々と進んでいた。ところが、その年の五月に総選挙が実施されることになっており、イベントを推進するメンバーの中には立候補者や選挙関係者も含まれていたため、誕生日当日である六月初旬の開催は現実的ではないとの結論に至った。そこで、情勢が落ち着いた秋以降、十月頃に延期することになった。たとえ、グラバーの誕生日という記念すべき日であっても、開催時期を固定してしまうことによって、長続きしないイベントに終わってしまうよりも、状況に合わせて柔軟に対応することの方が重要であると判断したのだ。

状況の変化はそれだけではなかった。関係者の間で延期の話が出始めた頃、私自身の帰朝の内示があった。自分がいる間に出来るだけのことをして、あとは後任者に引き継ぐことにした。八月の下旬に帰国し、その後は新しい職場と第二の人生に向けての準備で余裕もなかったので、第二回目のグラバー生誕祭がどのようなふうになったかはフォローできなかったが、関係者の意欲と努力によりその後も続いていることを祈っている。

(iii) 書道作品寄贈問題

アバディーン市にはここで紹介したい思い出がもう一つある。最初にグラバーハウスを訪問した時にその中で家具や日本のカレンダーに紛れ、多数の書道作品が飾ってあったことは前述のとおりだが、

ここでは余り詳細に紹介する誌面はないので割愛するが、その書道家である高橋香石氏にお会いし、了承を得て、美術館等での作品展を企画・実施することになった。最終的にはグラスゴウにあるミッ



書道作品展(高橋香石氏提供)

日は既に終了していたので、私が訪れた時に見られるとは思わなかったが、展示会が終わったにも拘わらず、その作者の作品は管理人の好意によりグラバーハウスに保管されていたのだ。



作品の贈呈(筆者所有)

その作品が非常にダイナミックだったので、それを活用して何か出来ないかと考えたのである。書道作品が展示されていたのは理由があった。グラバーハウスを書道の作品展示場として使っていたのだ。私も作品展のオープニングに招かれたのだが、残念ながら、エディンバラ

での仕事が入っていたので文化担当官に代わりに出席してもらったことがある。作品展の期

チェル・ライブラリー(ヨーロッパで最大の蔵書数を誇る図書館)など五カ所で実施した。そして、私が帰国する前に、いくつか作品を追加していただけで、全部で三二の作品を総領事館で買い取った上で、スコットランドにある三二の地方の首長に寄贈することにした。出来るだけ私が直接手渡しできるようにしたが、時間の関係で手渡せなかった相手には手紙を添えて寄贈した。

手紙には、それぞれの作品はそれまで作品展で展示したもので、将来作品展が行われるときには事情の許す限り作品の提供をお願いすることがあるかもしれないと書いておいた。私が直接渡すことが出来たある市長などは、非常に喜び、すぐその場で市長室の壁に飾っていたこともあった。私にとっては特に思い出深いアバディーン市の市長にも寄贈したが、非常に喜んでいただき、「最大限活用させていただきたい。」との言葉もいただいた。

その後まもなく最後にアバディーン市を訪問した時である。時間に少し余裕があったので、アバディーン市の美術館を訪れた。一通り早足で回っていると、何とそこに総領事館から寄贈した書道の作品が展示されているではないか。書道の作品を総領事館の倉庫に保管していつでも展示が出来るようにするという考えもあるが、私は少しでも多くの機会にスコットランドの皆さんに楽しんでもいただきたいと考えて、寄贈することを考え付いた。総領事館が買い取り、それを寄贈するなどそれまで経験のないことだったので心配もしたが、優秀な文化担当官が本省と協議の上実現の運びになった。一時的なイベントはそ

れだけで終わってしまうが、作品が市長室や美術館で掲示されている限り、いろいろな形で語り継がれ、受け継がれることになり、その方が間違いなく、より多くの付加価値をもたらすと信じている。ひらめきや創造性については、全く自信のない私であるが、私のアイディアの中では数少ない及第点がいただけるものかも知れない。

その後、私自身スコットランドとは全く関係のない部署で仕事をしてきたこともあり、スコットランドの現状をフォローする機会も皆無であった。しかし、今回の「マッサン展」を機会に関連記事を調べていたら、長崎市とアバディーン市が二〇一〇年に「市民友好都市」提携で合意したとの記事を見つけた。「姉妹都市」というほど厳密で公式的なものではなく、緩やかな友好関係を目指したもののようだが、何らかの合意に至り半歩でも一歩でも前に進むことの方が大事である。私が赴任したのが二〇〇四年であるから六年後に当たるが、私が滞在していた時にはただただある意味「がむしゃら」に日本とスコットランドの歴史的関係を訴えてきたが、それが「市民友好都市」として実を結んだことが自分のことのように嬉しかった。

二.「マッサン展」開催の経緯

外交史料館が「国立公文書館等」の一つにあたることを明確に規定した「公文書管理法」の中で、利用の促進を謳っている第二三条には、国立公文書館等は、「特定歴史公文書等」について、展示その他の方法

により積極的に一般の利用に供するよう努めなければならない」と規定されている。また「公文書管理法」の施行に伴って策定された「特定歴史公文書等の保存、利用及び廃棄に関するガイドライン」（以下、ガイドライン）では、公文書館等で展示計画を立案するに当たっては、国民の関心や歴史ドラマ等の内容を踏まえて展示のテーマを設定するといった工夫を凝らすようにとの指針が示されている。

外交史料館の所有する外交記録は、幕末以降の比較的新しいものが中心なので、NHKの大河ドラマで採り上げられる時代や人物に因んだ展示をする機会が、これまでほとんどなかった。また、幕末や明治維新をテーマにしたドラマがあっても、直接それを題材とした展示を企画することもなかった。館長になって以来私は、出来れば大河ドラマに限らず多くの国民が身近に関心を持つような人物や時代に因んだ展示をやってみたいと考えていた。二〇一三年の秋、飛び込んできたのがNHKの朝ドラで「マッサン」をやるというニュースであった。私の頭の中では、その時点で外交史料館の「マッサン展」のイメージが出来上がっていた。

ここでは、国民的関心と呼んでいるドラマをテーマとして展示することによって、遭遇した問題や課題などを自らの経験を踏まえ、記録に残すこととする。私は、「マッサン展」が成功するためには①NHKの協力、②アサヒビールの協力、③外交史料館が所蔵する政孝関連外交記録の存在が不可欠であると考えていた。③については、第二部で担当官が書くので、ここでは①と②を中心に書くこととしたい。

(一) NHKとの関係

何はともあれ、私はまず朝ドラの制作者であるNHKとコンタクトをとることにした。NHKに「マッサン」の話を聞きたいと申し入れたところ、「マッサン」はフィクションであり、実在の人物である竹鶴政孝とは直接関係がないので、どれだけお役にたてるかはわからないが、企画書を見た上で検討させてもらいたい。東京本社で受けるか、「マッサン」を実際に制作しているNHK大阪で受けるかも、企画書を見てから判断する」ということであつた。企画書を作成するためには展示の内容を確定する必要があるが、NHKから話を聞くまでは内容を確定できないというジレンマに晒された。そのとき、いろいろな機会にお世話になったことがあるNHKの方のことを思い出した。その方に相談すると、NHKの関係者を紹介いただくことができた。数日後、NHK本社を訪問し、関係者にパワーポイントを使って簡単なプレゼンをさせていただいた。

その後「マッサン」を制作しているNHK大阪の関係者も訪問し、「マッサン」のあらすじなど私の質問に非常に丁寧に答えていただくことができた。実在の人物をモデルにしている以上、どの程度忠実に史実に即して登場人物を描くかが非常に重要である。また、人物が中心になる場合にはその人生のどこからどこまでを扱うのかによっても展示は影響を受けることになる。私の疑問は一点を除き殆んどすべて明快な答えをいただくことが出来た。

NHKの制作意図が、史実よりもあくまでもフィクションとして、

関西らしくコメディータッチで描くという基本的コンセプトも確認出来た。政孝(ドラマでは政春)とリタさん(ドラマではエリー)が日本に渡ったところから始まること、初回から「蜜の光」が登場し、全体を通してスコットランド民謡がふんだんに出てくること、「政孝が一本のペンとノートでスコットランドからウイスキー製造の秘密を盗んだ」というヒューム副首相のユーモアあふれる賛辞は、別なオケージョンで駐日英国大使のスピーチとして出てくること、寿屋(現サントリー)の創業者の鳥井信治郎はマッサンの恩人として描かれること、などなど非常に参考になった。

他方、その場で解けなかった問題は、リタさんがいつ帰化したかということであつた。その時点までに私が目を通した本や資料ではリタさんが帰化した時期を明示したものがなく、確定出来ていなかったのだ。NHKとしてはどのように考えているのかを聞いたところ、NHKとしても承知していないので、逆に教えて欲しいと頼まれてしまった。宿題として持ち帰り、職員たちの知恵を借りた結果、当時の国籍法では二人が結婚届けを在ロンドン日本総領事館に提出した時点で帰化したこととなっていたことが判明した。実は、この結論に至るまでかなり時間を要したが、国籍法に思いが至らなかったことと、リタさんのパスポートが入手出来ていなかったことが最大の原因である。後刻アサヒビルから提供していただいたリタさんのパスポートは、在ロンドン日本総領事館が発給しており、その時点で既に法律的には日本人として扱われていたのだ。いろいろな意味で非常に勉強になった

一件であった。

NHKからのヒアリングも無事終わり、外交史料館としての展示の方針も明確になった。政孝とリタさんの人生を中心に据えるが、あくまでも淡々と史実に基づき、背景としての日本とスコットランドの長い歴史的絆を重視して描くということである。

ここで、ポスターに関し、苦心談を紹介させていただきたい。特にタイトル字は私にとっては「マッサン展」のポスターの最大のセールスポイントであった。スコットランドが生んだ最も著名な建築家・デザイナーであるチャールズ・レニー・マッキントッシュ（CRM）がデザインした文字をイメージして創作したものだったからである。CRMは日本びいきであったという点でも有名であるが、彼が日本文字をデザインするわけがない。スコットランドに因んだ展示であることを少しでもポスターに盛り込むための苦肉の策であった。フォントは



マッサン展のポスター

もちろん参考になるデザインも全くない中で素人の私が愚妻の協力を得ながらやっとの思いで作り上げたデザインである。「マッサン展」の五文字を作るためにどれだけの時間を費やしたことだろう。

しかしこのタイトルをめぐって「マッサン展」と銘打つことによって、朝ドラ「マッサン」の視聴者が、朝ドラの展示と誤解して来館し、その結果NHKの方にクレームが寄せられることになっては困るとの問題が浮上した。私が当初から「マッサン展」にこだわった最大の理由が朝ドラの人氣にあやかり、外交史料館の認知度を少しでも高めたということにあったのであるから、この問題は当然の帰結でもあった。

外交史料館の「マッサン展」はNHK朝ドラ「マッサン」の展示ではなく、政孝の愛称「マッサン」に関する展示であることを明確にすればよいのだが、それをポスターの中で簡潔に表現することは簡単ではない。注や説明文を入れることなどいろいろな案を考えた末、いつそのことポスターの本文で堂々と入れた方が却ってスマートだとの結論に達した。「マッサンと呼ばれて愛された政孝の」の文言をサブタイトルとして挿入することにしたのである。NHKからも、終始非常にきちんとした対応を示していただき、「琥珀色をイメージしたポスターがいいですね。」との言葉をいただいて、「マッサン展」の呼称に関わる問題も事なきを得た。

また、商標権の問題も確認する必要があった。NHKでは「マッサン」を商標登録しているので、「マッサン展」の呼称を使うことには

問題がないだろうかとの危惧が出たのだ。

幸いにもこの問題も思ったよりも早く、しかもこちらの希望通りで決着した。NHKは商標権の登録はしているが、それは主に商品に対してであって、展示会のタイトルについては登録していないので、NHKとして意見を言う立場にないというものであった。確かに商標権の登録手続きに関する規定を見ると、かなり細かく分類されており、その一つ一つについて登録する仕組みになっていた。その気になれば、その時点でも展示についても登録出来たはずなのに、外交史料館にとっては非常にありがたいNHKの対応であった。外交史料館の展示は無料で営利を目的としないことにも配慮していただいたと感じた。

以上のように、すべてにわたってNHKの好意的な対応に助けられた。この誌面を借りて心よりお礼を申し上げたい。そして、朝ドラの展示と勘違いして来館した方々にも、外交史料館の展示を見てよかったと思っただけのような展示を心がけるのが外交史料館としての責任だと思っている。

(二) アサヒビールとの関係

「マッサン展」が政孝という日本で初めて本格的ウイスキーを作った人物に関する展示である限り、ウイスキーを作っている会社との関係は重要な問題である。他方、「マッサン展」を企画するに当たっては、特定の商品や会社のみを取り上げているとの印象を与えないよう常に

心がけた。

政孝が創業したニッカウイスキーが現在ではアサヒビールの傘下に入っていることから、政孝やリタさんに関する展示品の拝借について、アサヒビールに申し入れたところ、快諾して下さった。また、同社で二人の人生を研究している方がおられることを知り、その方にもお会いして、いろいろ貴重な話が聞けたことも非常に参考になった。

アサヒビールからは展示品や写真の貸し出しを含め、全面的に協力をいただいた。特に、今年は朝ドラの「マッサン」がテレビ放映されるということで、余市や竹原市(マッサンの故郷)はもちろん全国各地でマッサン関連の展示が予定されるため、展示品に対する需要が非常に高まっている中で、しかも七カ月強という長期間の貸し出しに快く応じていただいたことに対して、この場を借りて改めてお礼申し上げます。

私が外交史料館での「マッサン展」を開催する意義について確信を持ったのは、二〇一四年の春に六本木ヒルズで開催された政孝とリタさんに関する展示であった。そこに展示されていた政孝のパスポートと外交史料館のパスポート発給原簿(第二部参照)を同時に公開出来れば、本邦初として好評を得ることが出来ると思ったのである。六本木駅を大胆に使ったポスターの迫力や、プロが手掛けた展示品の一つ一つのアレンジから見ると、外交史料館の展示はまだ素人の域を出ない稚拙なものであることはよく自覚している。しかし、一人でも多くの国民に、少しでも政孝とリタさんのことを知っていただきたい

と思う気持ちだけは誰にも負けないとの心構えで取り組んできたつもりである。

(三) サントリーとの関係(青いバラのものがたり)

今回の展示を構成していく中で、紆余曲折は多々あったが、最たるものが「青いバラのものがたり」であろう。

サントリーの創業者であり、政孝とも深い関係にあった故鳥井信治郎の二男でサントリーの二代目社長であった故佐治敬三が(佐治家の養子となっていたが、長男吉太郎が早世したため二代目の社長に就任した)、青いバラの品種開発を研究グループに依頼したこと、研究グループに「青いバラ」を恋人のように待っています」とのメッセージを送ったこと、そして、彼自身は「青いバラ」を観ることなく亡くなったが、開発グループは、一四年もの苦闘の末二〇〇四年、ついに「青いバラ」の品種開発に成功したことは事実である。

かつて、私は、ラグビーの大ファンであった佐治敬三が、ラグビー観戦でイングランドチームが赤いバラのエンブレムを胸に着けていたのを見たときに、ウイスキーの恩人であるスコットランド人が着ける青いバラがないので、彼らに青いバラを贈りたくなり、開発を思いついたというストーリーを人づてに聞いたことがある。青い色は、スコットランドの国旗が青地に白のセント・アンドリュース・クロスであることからのインスピレーションであろう。また、バラの花はかつて「バラ戦争」(一五世紀に起こった英国内における赤いバラを紋章とした

ランカスター家と白いバラを紋章としたヨーク家の争い)があったほど、英国人にはなじみ深い花なので、何とも粹な心遣いだと感心したものだ。

これこそ、スコットランドからウイスキー文化を教わり、日本に根付かせた当事者たちからの「スコットランドへの恩返し」と思い、このストーリーを今回の展示に加えることにより、現在まで脈々と続く、スコットランドと日本との関係を象徴できると考えた。私の中で「青いバラのものがたり」なしにはこの展示は完結しないとさえ思えたのだ。

ところが、さっそくサントリーに連絡し、青いバラに関して私が知っていることをまとめた原稿を送り、事実関係を中心に確認していただくことをお願いしたのだが、佐治敬三が一九九〇年に研究者グループに青いバラの開発を命じるきっかけとなった出来事は、サントリーに残っている記録では確認出来なかったとの回答が返ってきた。

「青いバラのものがたり」を展示解説に加えることの可否については、館内でもいろいろな意見が出た。しかし、検討の場で一人がぼつりと漏らした言葉が私の背中を強く押してくれた。「青いバラのものがたり」とは、新しいこと、一見不可能なこと(かつて「青いバラ」の花言葉は「不可能」への挑戦ですよ。その点では、大正時代にスコットランドに渡って伝統文化であるウイスキー作りを学ぼうとした竹鶴さんと一脈相通ずるのではないですかね」。

私の頭には、鳥井信治郎以来のサントリーの伝統「やってみなはれ

の精神」、失敗を恐れず新しいことに挑戦する進取の精神を伝えることが、今日の日本の閉塞した雰囲気にかきでも風穴をあけることにながってほしい、その切り口こそ「青いバラのものがたり」だとの考えがまとまった。

そのため、「マッサン展」の解説書には、ラグビー好きの佐治敬三がこう思ったのではないかという私の推測として、コラムの一つとして紹介させていただき、また造花ではあるが「青いバラ」を展示ケースに加えることによって、新しきことに挑戦した方たちへの敬意を表することで、一応の解決を見た。

ここで読者の皆様にお願ひしたい。佐治敬三が何を思つて「青いバラ」の品種開発を命じたのかに関して、何か情報をお持ちの方はささやかなことでも是非教えていただきたい。そのような情報を私は「恋人のように待っています」。

さて、青いバラに関する情報こそ得られなかったが、サントリー側からはその後も積極的な協力を得られたことも紹介したい。アサヒビールからお借りした政孝が残したメモには、政孝が寿屋に在職した頃のものも含まれていた。それらに関する展示解説やキャプションに丁寧に目を通していただき、適切なコメントを頂戴した。外交史料館の特別展示の説明資料のために、そこまで親身になって時間を割いていただいたことは、人手不足の当館にとって大変ありがたい限りであった。

今回の「マッサン展」をきっかけに、アサヒビールとサントリーには非常にお世話になり、関係者とも直接話をさせていただいた者として、一つだけお願いしたいことがある。

政孝と鳥井や佐治の関係がどうだったのかは本人たちにしかわからないことも多いとは思ふが、日本のウイスキー産業を作り、育て、今日の発展に貢献した彼らの功績は計り知れない。これはウイスキー産業という一つの産業にとどまらず、外国の文化を積極的に取り入れ、独自に発展させた一つの例証と言えよう。日本の未来のためにも、彼らの足跡を明らかにした、これぞ日本の「正統ウイスキー史」といえるものを是非協力して後世に残していただきたい。

三、土曜開館問題と別館展示室へのアクセス問題

「マッサン展」の開催に当たつて、展示室の土曜開館問題と別館展示室へのアクセス問題は、外交史料館の将来を考える上でも重要な問題として浮上した。いささか、本稿の主旨から離れる問題ではあるが、公文書館を運営していくにあたり、前例がないことを検討する場合に、思いもよらないアクシデントが起つたり時間が必要となることも理解してもらいたいとの気持ちから、あえてこの場で経緯を記録に留めておくことをご容赦願ひたい。

一九七一年に外交史料館が開設されたと同時に展示室も設置された。当初は、現在の本館閲覧室にあつたが、一九八八年に別館が新設され、その二階に移り、今日に至っている。

当初は、土曜日の午前中は展示室、閲覧室を含め開館していた。しかし、外交史料館が外務省の組織であるので、国の行政機関が土日は閉庁することとなった一九九二年以降、土日は閉館している。

しかし、展示の来館者へのアンケート調査では土日の何れかの開館を希望する声が少ない。これは、ウェブサイトでも同様の結果である。私は、外交史料館に発令になった（二〇一二年七月）当初から行政サービスの一環として展示室は少なくとも土曜だけでも開館すべきであると考えていた。「公文書管理法」のガイドラインでも、展示室だけではなく、外交史料館等全体の土、日開館について積極的に検討するよう謳われていたからである。

「マッサン展」の準備が着々と進む中、展示の会期は九月二十四日から翌年の五月八日までと決まった。かねて土曜日の展示室開館につき、館内の意見を聴取していたところ、賛同する声も多かったのが、九月と十月の土曜日五日間展示室を試行的に開館する方向で調整が図られた。後述する通用門の問題もあったが、そのために必要な警備員を配置し、その間は通用門が開放されることになった。十一月以降の土曜については、試行期間の土曜日来館者数を踏まえ、改めて検討することにした。

こうして、「マッサン展」のポスターに書かれていたように、「九月と十月の土曜については試行的に開館する」との文言を入れることになった。これに対し思った以上に反響があり、ツイッターなどでも肯定的に評価する声が聞かれた。そして何より、実際に土曜日の来館者

数も私の予想をはるかに超える数となった。提案者として正直なところ、ほっとしている。その結果、十一月以降も午後の半日ではあるが、土曜日も開館することになった。軽費面の制約はあるが、将来的には是非終日開館できるようになってほしいと心より願っている。

他方、土曜開館以前の問題として、別館展示室に入るためのゲートが常時閉まっている現状を改善しなければならないの思いは、「マッサン展」の企画以前から強く抱いていた。ゲートが閉まっているために、展示室の来館者は、ゲートの脇にある通用門（勝手口）のドアノブを自分で開けて、そこをくぐって入る必要があった。展示をわざわざ見に来ていただく来館者の方にそれを強いていることは申し訳ないと思っていた。また、見学者へのアンケート調査でも、「重々しい感じがして入りにくい」という声が少ない。

どのような経緯で現在のような仕組みになったのかにつき調べた。必ずしも判然としないが、外務省のゲストハウスが同じ敷地内にあるため、警備を厳重にせざるを得ないことがネックとなっている。

根本的解決のために、工事して門を建て直す必要があるとの結論に至り、幸い外務本省の関係者の理解も得られた。役人生活を終える前に、この問題だけは解決したいと思っていただけに、ようやく肩の荷を下ろすことができた気分だ。

さて、私の担当部分もそろそろ終わりに近づき、七カ月に及ぶ「マッサン展」の会期もほぼ中間点にさしかかったので、いささか時期尚早ではあるが、今回の特別展示を中間的に総括してみたい。

「マッサン展」は従来の外交史料館が実施してきた特別展示と比べ、「異質」な特別展示であることは間違いない。そのため、開催に向けて館内で議論した際にも、NHKの朝ドラに因んだ展示ということで、日本外交に関する史料を展示するという外交史料館の本来の使命からは逸脱するのではないかとの意見も根強かった。

しかし、「マッサン展」の反響は、私の予想をはるかに上回っている。来館者数の増加、特にこれまで外交史料館に足を運んだことがなかった人々が気楽に訪れ、楽しんでくれている様子がアンケートやウェブサイトの反響から読み取れる。さらに、ありがたいことには「マッサン展」目当てで来館して下さった方が、「常設展」にも関心を示して下さるという、史料館としては「歓迎すべき流れ」を示すウェブサイトの書きこみも散見される。

新聞社、テレビ局による取材、観光業者からの問い合わせなど、社会的な関心の高まりは、まだまだ続きそうだ。団体見学の依頼も急増し、担当官に対し市民カルチャーセンターより「マッサン展」に関する講演依頼も寄せられている。そして、知り合いを誘って何度も来て下さるリピーターの存在、全国各地からわざわざこの展示のために上京して下さる方までいることは、ありがたい限りである。

もちろん、来館者の多寡だけで展示の評価が決まるわけではない。しかし、前述のガイドラインにおいて、国民が関心を持つテーマについての展示を奨励しているのは、主催者側の一方的な「思い込み」に左右されず、利用者である国民の関心やニーズに応えることの重要性

を指摘したものである。特に、「外交知識の普及」という使命を有する当館の場合、日本外交への国民的関心を高め、「チーム・ジャパン」一丸となった日本外交の実現に向け、「国民目線」を大事にする必要がある。「マッサン展」がその契機となつてほしいというのが私の切なる願いである。

「マッサン展」開始以来、いつしかウェブサイトで「マッサン展」に対する意見をブラウザするのが私の日課になった。利用者の声に一喜一憂することもあるが、外務省にしてはユニークな試みであるなど、「マッサン展」や当館の取り組みを暖かくサポートするものの方が圧倒的に多いので、心強く感じている。もちろん、「ユニークさ」を肯定する意見ばかりではなく、「朝ドラの便乗企画」などの批判も寄せられている。しかし、当館にとっていろいろな意味で初めての試みに対して、危惧していた「外交史料館の特別展示には条約書や国書・親書のような貴重史料の展示を期待しているのに、「マッサン展」は邪道であり、このような展示は今後外交史料館がやるべきではない」といった類いの批判は幸い見当たらない。国民の多くが、そうした批判を抱くよりもはるかに寛大で外交史料館の秘めたる可能性に期待しているのではないかと云っては手前味噌過ぎるだろうか。

公文書管理法の施行前後より、公文書館等をめぐる環境はドラスティックに変化している。そのような時期だからこそ、展示に限らず既成概念にこだわらない柔軟な姿勢が必要であることを強く感じる。そのような命題に私なりに精一杯応えようとした結果、それが「マッ

サン展」である。

先日、「外交史料館など自分には無縁だと思っていたが、夢を追いかけている限り必ず実現するとのメッセージを届けてくれた」という趣旨の書き込みを見つけた時、「マッサン展」を実現して本当によかったとつくづく感じた。

公文書館等における展示は、貴重な史料を紹介し、その背景や意義と言った歴史的事実を正確に伝えることが重要であることは言うまでもない。しかし、そこに「夢」とか「希望」というエッセンスを加えることにより、展示の世界は限りなく広がっていくのではないか。それが「マッサン展」を通じて、私が得た教訓であり、退官前に外交史料館の諸君に是非伝えておきたかったことでもある。

第二部 「マッサン展」の展示史料について

「マッサン展」の企画を進めるにあたって最も危惧されたことは、「特別展示を組むにふさわしいだけの史料が集められるだろうか」という点であった。単に政孝を紹介することにとどまらず、日本とスコットランドの交流について明らかにし、スコットランドをより身近に感じて貰いたいというコンセプトに即して考えると、従来外交史料館が企画してきた特別展示にはなかった困難さがあることに容易に気づいた。それは、スコットランドが英国の単なる一地域ではなく、歴史的にも文化的にも独自性を有するとは言え、少なくとも日本と本格的に交流

が始まった幕末期から今日まで独立国ではないので、日本とスコットランドの間で取り交わされた条約書、あるいは国書・親書といったものが存在しないことは自明の理である。「マッサン展」の前に開催した「日本・トルコ展」など二国間交流の歴史を明らかにした特別展示で、来館者の目を引いた条約書や国書・親書の類を展示することは不可能なのだ。

展示を組む以上、ヴィジュアル的にも強いインパクトを与える展示品がいくつかはほしい。その点条約書や国書・親書の有無で展示候補選択の難易度が大きく変化する。その意味では今回の展示はかなり展示品選定が難しいと思われた。

ところが、ありがたいことにアサヒビールをはじめ、外部からの協力を得られたこともあり、分量的にも、内容的にも展示するのにふさわしい史料を集めることが出来たと思われる。以下、特に印象深かった史料を紹介していくこととしたい。

一、竹鶴政孝関係当館所蔵記録

政孝に関する史料はアサヒビールよりレブリカを約十点お借り出来ることとなったが、その中にはスコットランドで政孝が全身全霊を傾けて学んだウイスキー作りの工程を詳細にまとめたいわゆる「竹鶴ノート」二冊が含まれていた。この史料が見学者に与えるインパクトは絶大であることが容易に想像された。政孝の直筆であり、その美しく整った文字からは、スコットランドで学んだ知識を日本に伝えよう

とする情熱がほとばしるようだ。実際、特別展示開催以来、多くの見学者が熱心に観る史料の代表例がこのノートである。

しかし、手放しに喜んではいられなかった。外交史料館の特別展示である以上、政孝に関する外交史料館の史料も展示したい、いやそれなしでは外交史料館の特別展示とは言えない。外交官でもなく、民間外交に活躍したとは必ずしも言えない政孝であるが、外交史料館所蔵史料に政孝の名前が載っているものを是非とも見つけたいと考えた。

(一) 旅券発給関係史料

最初に考えたのが政孝の旅券発給記録を探すことだった。政孝の経歴を確認すると、戦前期には一九一八年、一九二五年、一九三一年の合計三回スコットランドを訪れていたことがわかった。外交史料館で保管されている戦前期の旅券発給記録は膨大なので、その中から一人の人物の旅券発給記録を探すことは容易ではない。しかし政孝の場合、時期が特定できるので、比較的容易に見当がつくと思われた。ただし、当時は現代と違って必ずしも居住地で旅券を申請する必要があるないので、例えば初めてのスコットランド留学の際の旅券発給記録は、当時住んでいた大阪府、実家のある広島県、さらには神戸港から乗船したことがわかったので、兵庫県などのいずれから発給された可能性が高いと考えられた。ところが、それら一府、二県で発給された英国渡航の旅券発給記録に政孝の名前は見つからなかった。念のため東京や神奈川、さらには時期も広げて探したが見つからなかった。実は政孝はま

ず渡米し、カリフォルニアでワイン作りの勉強をしてから渡英したということを失念していたのが混乱の原因であった。渡航先がアメリカ合衆国の旅券発給記録を調査すると、案の定一九一八年四月に大阪府より発給されている史料に出会えたのだ。遠回りしてしまったが、これで政孝の名前が載った外交史料館所蔵史料が一点確保できたのであった。

その後、一九二五年の発給記録は、大阪府から発給され、リタ夫人の名前も政孝の隣に載っていた。次は一九三一年の発給記録を見つければ全て揃うと思い、張り切って探し始めたのだが、大阪、兵庫、広島どこを探しても見つからない。すると、外交史料館で旅券(そして移民)に一番詳しい柳下宙子閲覧室長が神奈川県から発給された記録を発見した。これで旅券発給記録が全て揃った。神奈川県で発給されたのは、カナダ経由でスコットランドに向かったので、横浜港から出航したものと思われる。

ちなみに一九三一年の旅券発給記録には、子供がなかった竹鶴夫妻がその前年に養女として迎えた房子の名前も載っている。一九一八年の記録は政孝一人、一九二五年はリタ夫人と二人、一九三一年は房子が加わり三人、奇しくも竹鶴家の家族の歴史を語る史料でもあるところが興味深い。

また、思わぬ発見もあった。そもそも一九三一年のスコットランド訪問は、寿屋の鳥井社長より、長男吉太郎に本場のスコッチ・ウイスキー作りを実見させたいので、案内して欲しいと依頼されたことによ

り実現した。政孝一家の旅券発給記録を採る過程において、大阪府から吉太郎に発給された史料を見つけたので、展示品に加えることができたのだ。

(二) 結婚証明書に関する史料

政孝とリタ夫人の結婚は、一九二〇年一月八日、グラスゴウのカルトン登記所において結婚宣誓という形で行われた。

海外居住の日本人に戸籍上の変更、すなわち結婚、子供の出生、死亡などの事態が生じた場合には最寄りの在外公館に届け、同公館が取りまとめて三カ月毎に報告し、外務省よりそれぞれの本籍地に報告されていた。政孝夫妻の結婚関係の史料も残っている可能性が高いと思っただけのところ、やはり「内外人婚姻関係雑件」のファイルに綴じ込まれていた。

一九二〇年四月二十三日付の在ロンドン矢田七太郎総領事から内田康哉外務大臣宛公信「広島県人竹鶴政孝結婚証書送付ノ件」がそれだ。先のカルトン登記所で発行された結婚証明書を在ロンドン日本総領事館に提出し、それを受けた総領事館から同公信に証明書を添付して本省に送ったものだ。そして、証明書そのものは政孝の本籍地である広島県賀茂郡竹原町に送られたので、外交史料館には公信だけが残っているのだ。

この公信の興味深いところは、リタ夫人のことを「英国人」ではなく「スコットランド人」と記していることだ。国籍の面から考えれば

「英国人」と記するのが普通であるが、あえて「スコットランド人」と記した理由はわからない。あるいは、日本では「英国人」と一括りにするのが普通であるが、英国に在勤していたロンドン総領事館の館員たちは、「郷に入らば郷に従え」で、英国人たちの影響を受け、スコットランド人や北アイルランド在住のアイルランド人などを区別する習慣が身についていたのかもしれない。

なお、政孝関係の史料としては、アサヒビール提供の史料、外交史料館所蔵史料以外にもう一点、政孝がグラスゴウ大学の夏季講座を受講した際の受講証がグラスゴウ大学に残っていて、同受講証の画像を前出の北教授より提供していただけたこととなった。同教授に対し深甚なる感謝の意を表するものである。

二. 叙勲関係記録

今回の特別展示では、日本とスコットランドの交流を多面的に紹介していくことを一つの目標としていた。その際に技術協力は、欠かせない要素だと思われた。単に英国の中でも工業先進地帯であるスコットランドから多くのことを学んだというだけではなく、フォース鉄道橋の建設に渡邊嘉一が大きな役割を果たし、スコットランドの紙幣に彼の姿が描かれていることは、まさに「技術協力」という言葉がふさわしい。それを明示するための展示史料はどのようなものがふさわしいか、これもなかなか難しい問題であった。

一案としては、いわゆる「お雇い外国人」として来日し、日本の近

代化に尽力してくれた人々の中にはスコットランド出身者が多数含まれていた。彼らの関係史料を並べるという方法も考えられた。しかし、お雇い外国人として日本を訪れたスコットランド出身者はあまりにも多数にのぼるので、なかなか人選は難しい。慎重に検討した結果、工部寮および工部大学校(東京大学工学部の前身)の初代都検(実質的校長)であったヘンリー・ダイアーは、さまざまな分野で活躍することになる多くの人材を育てたこと、さらにはその教え子の一人に渡邊嘉一がいたことから考えても、ダイアーの関係史料こそ展示するにふさわしいという結論に達した。

さらに今回の特別展示が「お雇い外国人」を主題にしたものではない、あくまで日本とスコットランドの交流史を明らかにすることから考え、世界的な物理学の権威であったグラスゴウ大学教授ケルビン卿を外すことはできないと思った。ケルビン卿は、訪日したことこそないが、ダイアーをはじめ優秀な人材を日本に派遣するために尽力し、さらには日本人留学生を親身になって世話し続けた人物である。日本とスコットランドの技術協力を明らかにするというコンセプトに最適な人物と言っても過言ではあるまい。

しかし、ダイアーとケルビン卿、それぞれの功績を明らかにする展示品候補は何があるだろうか。ダイアーの場合「お雇い外国人」ということで、まさきに雇傭関係の史料が考えられたが、それはあくまで雇傭した事実がわかる史料であって、ダイアーの功績を明らかにするものではない。さらに、ケルビン卿の場合には、当然ながら雇傭関

係の記録はない。

この二つの問題を一気に解決してくれるのが叙勲関係の史料であった。叙勲関係の史料であれば、日本政府が彼らの功績を高く評価していたことの証左にもなり得るし、叙勲の理由が書かれていれば彼らの足跡の一端を見学者に理解いただくことも可能である。ダイアーには彼の帰国直後の一八八二年に勲三等が、ケルビン卿には一九〇一年に勲一等旭日章がそれぞれ日本政府より贈られていて、関係する史料も確認できたので、これで「日本・スコットランド技術交流」の展示品候補は無事揃ったのであった。

その上で、叙勲関係の史料の調査は、思わぬ幸運をもたらしてくれた。英国人に対する叙勲関係ファイル調べていた際に、トマス・グラバーに対する叙勲関係の史料を見つけたのだ。

グラバーについては、第一部で詳しく採り上げているとおりだが、「日本・スコットランド技術交流」という枠組みにはいささかなじみにくい。しかし、一九〇八年に日本政府より勲二等旭日重光章を贈られた際の関係史料は、実に興味深い内容であり、「日本・スコットランド技術交流」の枠組みにはなじまなくても、今回の特別展示の第一の枠組みである「幕末期の日本・スコットランド関係」には非常にふさわしい内容である。これを展示しないのはあまりにももったいないということで展示品候補に加えることとした。

グラバーの叙勲にあたり、伊藤博文と井上馨が連名で提出した申請書が残っている。その冒頭に「慶応年間長薩二藩聯合ニテ王政回復ヲ

策スルニ方リ其間ニ介在シテ頗ル周旋ノ勞ヲ執リ」とある。この「長薩二藩聯合」という表現は、伊藤、井上両名が長州藩出身であることを考えると非常に興味深い。

この申請書には、叙勲の理由を説明するための「維新前に於けるデ、ビー、グラバの事跡概要」という書類が添付されている。これは八枚にわたり詳細に幕末期におけるグラバーの活動を紹介していて、坂本龍馬、高杉晋作、中岡慎太郎、桂小五郎、パークス公使、シーボルトなどの名前が次々と出てきて大変興味深い。展示スペースの都合により今回最初一枚だけしか展示できなかったのが残念であるが、いずれ稿を改めて全文を紹介することとしたい。

三、裕仁皇太子（昭和天皇）スコットランド訪問関係

一九二一年、裕仁皇太子（後の昭和天皇）が約半年をかけ欧州諸国を訪問されたことはよく知られているが、この際にスコットランドも訪問され、貴重な体験をされている。スコットランドで、皇太子を接待したのはアソール公爵であり、同公爵のブレア城に滞在された。季節はさわやかな初夏であり、皇太子は公爵と鱒釣りに興ずるなど、スコットランドの自然を大いに満喫された。

特に、印象深かったのはアソール公爵が催された晩餐会であった。晩餐会には近隣の住民も招かれ、公爵も公爵夫人も気さくに人々と歌い、踊っていたようだ。その姿をご覧になった皇太子は、貴族富豪がアソール公爵のように公共のためにつくせば、ポリシエビキのような

運動も起こらないであろうとの感想を漏らされ、国民とともに歩む皇族のあり方を学んだと言われる。

『昭和天皇』（全七冊、文藝春秋社、二〇〇八―一四年）の名著を書いた福田和也氏は、裕仁皇太子の訪欧に関し、その後の人生に大きな影響を与えたであろう出来事の一つとしてスコットランド訪問を挙げ、特にアソール公爵主催の晩餐会については「この一夜の出来事は彼の人にとって感銘深かったようで、皇太子裕仁はアソール公を『貴族の模範』と言い、帰路の船中で何度も話題にした」（福田和也）「籠の鳥」が自由と君主のあるべき姿を学んだ6か月の「欧州外遊」『SAPIO』二〇一四年十一月号、一三頁）と、この晩餐会の意義を高く評価している。

裕仁皇太子の訪欧に関するアソール公爵主催の晩餐会に出席したことを報じる電報が見つかったので、それを展示の中心に置き、それを補填するものを考えることにした。そこで思い出したのが、以前外交史料館に史料関係の問い合わせをされてきたことで知り合った中村繁夫氏のことだった。中村氏は、大正から昭和初期に作られた絵葉書のコレクションを所有されている。そのコレクションを観ていただきたいことがあり、裕仁皇太子の訪欧記念関係の絵葉書もあったことを思い出したのだ。早速中村氏に連絡をとり、貴重な絵葉書を外交史料館の特別展示にお貸し願えないか、相談したところ、即座に快諾いただくことが出来た。

裕仁皇太子の訪欧記念絵葉書は三枚セットで、全て展示させていた

だくこととなったが、特に裕仁皇太子の写真が入った一枚には皇太子が辿ったコースの地図が記されていて、訪問地としてエディンバラも記されている。まさに今回の特別展示の趣旨にふさわしい絵葉書と言えよう。

裕仁皇太子の訪欧の翌年、答礼として英国皇太子(後のエドワード八世)が来日されているのだが、中村氏はその際の記念絵葉書、さらには当時の東京市長後藤新平が英国皇太子の歓迎晩餐会における歓迎の辞を記し、晩餐会出席者に配布した非常に美麗なはがきサイズの貴重な史料も貸していただけたことになった。これに外交史料館所蔵の英国皇太子訪日関係ファイルに綴じられた『*Far East*』誌の皇太子来日記念号に載っていた皇太子の写真も並べ、当時の日英間の皇室外交の親密さを示すコーナーを構成することができた。

貴重な絵葉書などを快く貸して下さった中村氏に、この場を借りて深甚なる感謝の意を表するものである。

四 札幌冬季オリンピック関係

「幕末期の日本・スコットランド関係」に始まり、「日本・スコットランド技術協力関係」、「皇室外交とスコットランド」、「竹鶴政孝関係」と、四つの枠組みについてほぼ展示史料が固まってきた。しかし、「竹鶴政孝関係」については、スコッチ・ウイスキーの製法を日本に伝えた人物という側面、そしてリタ夫人との夫婦愛という側面は描くことができたが、それだけで終わってしまつては、政孝という人物の人間

的魅力を描ききれたとは思えなかった。ウイスキーから離れた分野でもさまざまな社会的貢献をした政孝である。是非そのような切り口から政孝の魅力を伝えたいと思った。

その場合、一番ふさわしいテーマと思われたのが、一九七二年に札幌で開催された冬季オリンピックだ。札幌オリンピックは、日本、そしてアジアで初めて開催された冬季オリンピックであり、日本が冬季オリンピックで初めて金メダルをとった記念すべきオリンピックであったことは周知のことだが、この金メダル獲得に政孝が貢献したことはあまり知られていないのではなからうか。

話は、太平洋戦争勃発直前の一九四一年にさかのぼる。大日本果汁株式会社(ニッカウキスキーと社名を変えたのは一九五二年のこと)の工場があった余市の中学校校長が政孝に一つの願いを伝えた。スキーのジャンプの練習場を造りたいというのだ。これを聞いた政孝は、当時まだ大日本果汁株式会社の経営が必ずしも順調ではなかったにもかかわらず建設費用を負担したのであった。こうして造られた練習場は、正式には桜ヶ丘シャンツェという名前であったが、いつしか人々は功労者の名前をとって「竹鶴シャンツェ」と呼ぶようになった。

この「竹鶴シャンツェ」で練習に励んだ一人に余市出身の笠谷幸生選手がいた。彼は明治大学卒業後、ニッカウキスキーに入社した。この二重三重に政孝と縁が深い笠谷選手が札幌オリンピックの大舞台で七〇メートル級ジャンプに出場し、見事金メダルに輝いたのだ。政孝にとっても最高の喜びであつたに違いない。

是非、特別展示の最後の枠組みとして「札幌冬季オリンピック」を加えたい。そう思っただけでアサヒビール側に札幌オリンピック関係で展示品になり得るもの、当時の社内報の特集記事、関連の写真などが残っていないか問い合わせしてみた。当初なかなか見つからず、せっかくのアイディアであるが、展示品がなければ枠組みを構成することは不可能かと諦めかけた。しかし、当方の意図を理解し、アサヒビール側も熱心に古い記録を調べて下さった結果、ついに何枚かの貴重な写真が出てきたのだ。ジャンプしている笠谷選手の勇姿を写した写真に本人がサインしたもの、そしてニッカウキスキーで行われた祝勝会で政孝と笠谷が談笑している写真やスピーチする笠谷の後ろに政孝が立っている写真などだ。これにより五つ目の枠組みが成り立ったのであった。

「マッサン展」開始以来、多くの見学者が訪れているが、この札幌オリンピックのコーナーは特に見学者の関心を集めている。諦めずに貴重な写真を探し出して下さったアサヒビールの関係者には感謝に堪えない。

おわりに

歴史はある事象が起こったことだけを記録し、それだけで終わるものではない。歴史はさまざまな形で後世に引き継がれ、人々によって紡がれて初めて意義があるともいえる。

政孝によって日本に伝えられたウイスキー製造技術は、本場のス

コットランドを超えて世界一のウイスキーとして評価され、世界に逆輸出されるまでになっている。しかし、政孝はどこまでも謙虚に恩人であるスコットランドには敬意を表し、最後まで本場のウイスキーを作ることを目指して努力を続けた。鳥井信治郎は日本のウイスキーの育ての親ともいえる存在であり、それを継いだ佐治敬三は、スコットランドに恩を返すために不可能といわれた青いバラを世界で初めて世に出す功労者となった。

「マッサン展」は、政孝とリタさんの生きた時代を通し、その背景となった日本とスコットランドの歴史的なつながりを少しでも多くの方に知っていただきたいと企画された。

政孝という一人の青年が追い求めた琥珀色の夢は間違いなく実現し、現在でも多くの人々によって受け継がれている。青いバラのものがたりはその一つであり、それ以外にも世の中には知られていない「ものがたり」が沢山あるに違いない。

外交史料館にはそれぞれの夢を追い求めて生きた数多くの先人の記録が多数残されている。外交史料館に残されている歴史公文書等は断片的で夢のかげろしかわからないかも知れない。しかし、そのかけらから少しでも当事者の思いや願いをくみ取ることができ、それらを皆さんに伝えることにより少しでも後世の役に立つのであれば、それに過ぎることはない。

今回の「マッサン展」が始まってから、見学者から度々聞かれる言葉は「このような施設があると初めて知りました」である。展示をきつ

かけにして公文書館の存在そのものを知っていただき、公文書を保管していく必要性を理解いただくこと、それこそ外交史料館のような公文書館が展示業務を行う意義に他ならないのではないかと。

「マッサン展」においても、政孝などの旅券発給記録を観て、「このような昔のものがよく保存してあるものですね」という感想を度々耳にする。そのような驚きが、公文書館の必要性に対する理解の一助となることを信じたい。

それと同時に、「竹鶴政孝の旅券発給記録があるのなら、明治〇〇年に渡米した祖父の記録もあるのではないか」などと思ひ、今度は閲覧にいらしてくる方が現れれば、望外の喜びである。

かつて、英国の国立公文書館を出張で訪れたのだが、閲覧者の多くは研究者でも学生でもないごく普通の市民であり、彼らが実に楽しみに先祖に関する史料を閲覧していたのに感銘を受けた。これこそ公文書館のあるべき姿だと思ったのだ。展示をきっかけにそのような閲覧者が少しでも増えれば、公文書館が展示を行う意義も一層高まるのではなからうか。

「マッサン展」と銘打って、どれだけ政孝やリタさんの思いが伝えられたかは来館者の評価を待つしかないが、外交史料館が保有する貴重な史料が少しでも多くの国民に利用されることによって、自らの生き方や我が国の行く末を考える一助となることを願って止まない。

最後に、本文を読んで「マッサン展」とやらを、一つ観に行ってみようか」と思っ下さった方にお願ひがある。それは、是非アンケート

トに協力して率直な意見を聞かせていただきたいことである。皆さまから寄せられた意見を参考にしながら、今後の展示をより多くの方々に楽しんでいただける内容にしたいと願っている。よりよい展示を実現する最善の方法は、見学者の皆さまの声を聴き、対話を図りながら一緒に考えていくことにあると確信しているからである。皆さまのご協力を衷心よりお願い申し上げる次第である。